

TRANS

「『翻訳』の諸相」研究会 Newsletter No.8

2004/05/14

研究会の報告 (活動状況とお知らせは、最終ページに掲載しています。)

「テキスト輪読 : Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from the Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press, 1975.」範囲：第 2 歌第 18 連から第 40 (41) 連まで

ナボコフはこの注釈を完成させた後、*Pale Fire* を書いている。両者の形式上の類似性は一目瞭然であるが、キンポートを突き動かしている「ゼンブラー幻想」に相当するようなものが、この注釈の中に何か見つからないだろうかと考えながら、今回の担当部分を読んだ。その結果、ナボコフが頻繁に指摘する Gallicism が「ゼンブラー」に当たるかもしれないと思った。もっとも、キンポートのゼンブラー幻想が客観的には荒唐無稽なのに対して、ナボコフの Gallicism には客観的根拠があることも多いのであるが。奔放不羈な天才ナボコフの心中は図りがたいが、「ゼンブラー」と Gallicism の間には何らかのつながりがあるかもしれない。

以下、各連の内容をまず示し、ナボコフの加えた注釈の中で、興味深いものを取り上げて、それに筆者の感想を付け加えた。

18 連 年老いて若い頃の情熱を失った時、我々は恋する若者が打ち明ける熱い胸の思いに時折、耳を傾ける。老兵が血氣盛んな若者の物語る戦場での決死行に聞き入るように。

* ナボコフはこういうトポスは古くから存在し、ロンサールにまで遡るという。フランス文学の影響を強く受けたプーシキンの作品には、多くのフランス起源のトポスが流れ込んでいることだろう。しかし、ロシア人注釈家にはそれをいちいち指摘するのは難しいのではないだろうか。フランス文学の深い知識がないため、というよりは、近代ロシア文学の父、詩聖プーシキンの代表作がフランス文学から生まれたような印象を与える注釈は加えにくいだろう。ナボコフにはそれが可能である。

* Usach(髭を生やした人間)に注釈を加えて、ナボコフはこれを Gallicism だという。髭、もしくは髭を生やした人間によって兵士を表すという表現法がフランス語にあることを指すのだろ

う。Gallicism の指摘はこの注釈書の至るところに見られる。この注釈書を断片の集積ではなく、あるまとまりを持った、独立した作品として捉え、論じようとする場合、Gallicism はキーワードになるかもしれない。

19 連 レンスキーは、燃える思いを語りたい気持ちを抑えかねて、オリガへの愛をオネーギンに打ち明ける。

* 14 行目の *to us* に付けた注釈で、ナボコフはプーシキンとオネーギンと *the Reader* (その中には当然、ナボコフも含まれるだろう。) を同じく *us* に含めているが、これから先、プーシキンはオネーギンに対する共感を失い、代わりにタチヤーナに強く惹かれるようになるが、そうなった時、ナボコフはプーシキンやオネーギンに対してどのようなスタンスを取るのだろうか。

20 連 オリガに対するレンスキーの愛は今では詩人にのみ可能な愛で、純粋で、強烈で、何物によっても消されることはない。

* 14 行目の *virgin fire* に付けた注釈で、ナボコフはレンスキーの性格描写はすべて、当時流行の言葉を使ってなされていると指摘する。ということはつまり、熱烈、純粋な詩人レンスキーをプーシキンは流行の意匠に現を抜かす、芸術を模倣した自然の一例、パロディとして表現しているということだろう。

21 連 レンスキーは許嫁のオリガが谷間のユリのように人知れず成長するのを優しく見守る。

* 3,4 行目に付けた注釈で、この表現は露骨な Gallicism であるとして、*Il fut le témoin attendrit de ses ébats enfantins.* という例を挙げている。この例はプーシキンがこの表現を用いた時、思い浮かべていたであろう（とナボコフの考える）フランス語をナボコフ自らが再現したものであろう。フランス語の達人ナボコフにはこの例が由緒正しい、フランス語独特の表現であることは自明なのだろうが、ここは典拠を示す必要があるのではなかろうか。

* 7,8 行目の注釈で、ナボコフはこの部分の自分の翻訳はぎこちないが正確であると述べている。ナボコフの言うように、彼の翻訳ではこの個所はロシア語の語順通りに、英語の単語が並んでいる。ナボコフ自身が言う通り、ナボコフ訳『オネーギン』は総じてロシア語の初心者にとって、study aid の役割を果たす強い味方であるように思う。

* 11 行目の *V glazah* に付けた注釈で、ナボコフはこの表現の Gallicism であることを指摘する。このような基本表現は露仏両言語に共通して見られても偶然の一致の可能性が高いにも関わらずである。このプーシキンの用例と引用されているトルストイの用例とでは意味が違うが、このロシア語の表現が 2 つの違う意味を持ち、対応するフランス語の表現も同じく 2 つの違う意味を持つことが Gallicism と断定する根拠なのだろうか。それはともかく、19 世紀初頭のロシアが舞台のトルストイの『戦争と平和』を読めばすぐに分かるように、当時、教養あるロシア人は日常生活でフランス語を用いていた。また、その頃になってやっと、ロシア語は文章語として確立するのだが、その際、フランス語が大きな役割を果たしたことは十分に考えられる。よく言われるように、近代ロシア文学がプーシキンとともに始まった時、それと同時に、近代ロシア文章語も始まった。これを具体的に言い換えれば、プーシキンは簡潔なフランス語の表現を借用して、それまで存在しなかった簡潔なロシア語の文章を生み出したということになるだろう。このことから考えて、ナボコフがプーシキンの表現に頻繁に Gallicism を指摘するの

は大いに根拠のあることである。ただ、ナボコフの Gallicism の指摘は度を越してはいないだろうか。ナボコフの個人的事情(若くしてロシアを離れ、以後ずっと外国暮らし)を考えなければ、彼の Gallicism の指摘に賛同できない場合も多いのではないだろうか。

* ヴァリアント b への注釈で、そこに見られるプーシキンのイギリス人、フランス人家庭教師に対する（ナボコフにとって）意外な批判が、決定稿では放棄されたのは賢明であると述べている。ナボコフはどんな場合も西洋文化の影響を擁護するのかもしれない。プーシキンが詰まらない西洋かぶれを時に批判するのに対して、骨の髄からの西洋派、ナボコフにはそれができないのではないだろうか。

* ヴァリアント b の削除された異文 Mistress は、手書き原稿では、フランス風に Mistrisとなっていたに違いないという指摘にはナボコフの、フランスに対する思い入れの激しさが窺われる。

22 連 オリガはレンスキイに靈感を与え、詩が生まれる。レンスキイはオリガによって、子供から青年へと成長する。

* 5 行目の golden games に注釈を加えて、そこにはレンスキイのフランス的言語世界があると指摘するが、どうしてドイツ留学帰りのレンスキイがフランス的言語世界と関係があるのか。ここにもナボコフのフランスに対する強い思い入れが垣間見える。

23 連 レンスキイにはオリガが控え目で、おとなしく、明るく、率直で、優しく見えるが、それはレンスキイがどの小説にもよく見られる紋切り型のヒロイン像をオリガに投影しているからに過ぎない。

24 連 姉の名前はタチヤーナ。その名前は古臭く、鄙びており、小説の登場人物には相応しくない。もっとも当世風に気取った名前よりはましである。

* 1 行目への注釈で、ナボコフはタチヤーナという名前が当時は下層階級の名前であったと指摘する。草稿を見ると、プーシキンはヒロインの名前として、タチヤーナとナターリアで迷っていた形跡があり、タチヤーナに決めたのはその方が韻を踏む単語が多いためだと言う。この理由付けは如何にもナボコフらしいが、プーシキンがタチヤーナを登場させたのはロシアの大地のような彼女によって、浮ついた外国かぶれの、根無し草の上流階級、つまりオネーギンを批判するためではなかったのか。ここで興味深いのは典型としてのタチヤーナのナボコフ流の捉え方である。ナボコフもタチヤーナが小説のヒロインに止まらず、国民的一典型になったことは認める。しかし、ナボコフは彼女の系譜を文学作品の中に辿ることをせず、代わりに、タチヤーナは現実に多くの女性革命家を生んだと言う。そして、彼女たちは実際に農民、労働者と接して、彼らを理解できず、理解もされずに文学の世界から姿を消したと言う。また、革命後、ソヴィエト文学で幅を利かせたのはオリガであると言う。ここで、ナボコフは巧妙にタチヤーナの文学的系譜を論じることを避けている。論じればツルゲーネフの『ルージン』のナターリア、ドストエフスキイの『罪と罰』のソーニャ等、タチヤーナに連なる女たちが当然見えてくるはずである。ナボコフほどの大読書家にそのことが分からぬはずはない。なぜ、避けたのであろうか。

25 連 タチヤーナはオリガの美貌を持たない。彼女は垢抜けず、悲しげに物思いに耽るばかりで、無愛想である。子供なのに、子供の遊びに加わらない。

- 26 連 子供の頃からタチヤーナは物思いに耽つてばかりで、女のたしなみである裁縫もしなければ、人形相手のままごともしない。
- 27 連 人形相手のままごとや子供らしいいたずらの代わりに、タチヤーナは恐い話を聞くことを好んだ。
- 28 連 タチヤーナは早起きで、夏にはバルコニーに出て、星が消え、夜が白むのを眺め、冬には暗いうちから、ろうそくの光を頼りに、起き出して、身支度をする。
- * 2 行目の *preduprezhdat'*に注釈を加えて、ナボコフはこの単語の訳語として *prevene* という廃語を用いたのはこの単語も廃語だからだと述べているが、*preduprezhdat'*は基本語で、初級ロシア語辞書にも載っている。単語としては基本語でもここでの語義が廃れている場合もあるので調べてみると、この単語は普通、警告する、予告するという意味で使い、次に予防する、先手を打つという意味で使い、最後に、先んずる、先を越すという意味で使うことが分かる。ここでは 3 番目の意味で使われているが、この意味も初級ロシア語辞書に載っている。この事実をどう考えればよいのだろうか。*native Russian* がこんな思い違いをするものだろうか。
- 29 連 タチヤーナは読書が好きで、リチャードソンやルソーの小説を読む。父親は読書に無縁の男だったが、娘や妻の危うい読書を許容する。
- 30 連 タチヤーナの母親は娘時代に、従姉妹からの又聞きで、リチャードソンの小説を知り、当時、婚約中の好きになれないラーリンよりも、小説中の人物のような近衛仕官に熱を上げる。
- 31 連 親に無理やり結婚させられた妻を慰めるために、賢明な夫は彼女を領地へ連れて行く。最初、気が狂うかと思われた彼女も次第に落ち着き、日常の暮らしを始める。
- * 14 行目に注釈を加えて、幸せは習慣の中にあるという考えはシャトーブリアンにもヴォルテールにも見つかると言う。ナボコフはここでもフランス文学にトポスを探している。
- 32 連 彼女の悲しみを和らげたのは、繰り返される日々の営みであったが、家庭内で、勝手気ままに暴君として振舞うことを覚えてからは決定的に落ち着いた。
- 33 連 娘の頃はフランスかぶれで、話し方にも、身だしなみにも気取りがあったが、今や外国かぶれはすっかり陰をひそめて、身につけるものも実用本位。
- 34 連 それでも夫は妻を愛しており、彼女の計画には口を挟まない。お隣さんをお茶に呼んだり、気の置けない友人とおしゃべりを楽しんだりして、何事も無く毎日が過ぎてゆく。
- * 草稿の 7-8 行目に触れて、草稿では隣近所の人が具体的に司祭、その妻、警察署長となっているが、それではあまりにラーリン家の格が下がるので、決定稿では削除したのだろうと言う。このあたり、ナボコフはラーリン家を何とか持ち上げようと躍起になっているように思える。また、ラーリン夫人はそのモスクワに住む未婚の従姉妹から判断して、旧姓はプリンセス・シチュエルバーツキーで、トルストイの『アンナ・カレーニナ』のドリーの母方の大叔母にあたるかもしれないと言う。まるで、ラーリン夫人もドリーも実在の人物であるかのように。恐らくナボコフにとっては現実の世界と対等に、フィクションの世界が実在するのであろう。フィクションの世界は作家毎、作品毎に区切られていて、互いに無関係なのに、ナボコフにとっては現実の世界同様に、繋がっているのだろうか。しかし、ナボコフは本気でこんな注釈を付けているのであろうか。

35 連 穏やかな日常生活の中で、ラーリン夫妻は昔ながらのしきたりを重んじた。

36 連 ラーリン夫妻はみんなと同じように年老いて、惜しまれながら、夫が死ぬ。

* 12 行目の Dmitri Larin に注釈を付けて、Larin という名前は実在するという。1840 年代のある時、作家のアレクサンドル・ヴェルトマンは旧友のイリヤ・ラーリンとモスクワで偶然出会った。彼は変わり者の風来坊であった。ロシア中を放浪し、キシニョフ時代のプーシキンとは知り合いで、その酒席での道化ぶりでプーシキンを楽しませたという。この人物が偶然、プーシキンにタチヤーナの父親の名前を提供したのだとナボコフは言う。そして、恐らくプーシキンの意識下には、この道化のラーリンと次の連のヨリックを繋ぐ糸が見つかるだろうと言う。モスクワで偶然出会った時、ラーリンはヴェルトマンに尋ねた。「プーシキンを覚えているかい。いい奴だった。今、どこにいるか知っているかい。「とっくの昔に死んでしまった。」とヴェルトマンは答えた。「本当かい。可哀想に。ところで、ヴラジーミル・ペトロービッチは（誰であるかはともかくとして）どうしている。今、何をしているのか。」

この個所はまるで小説の一節のように読める。このくだりの典拠がヴェルトマンの回想録であるのなら納得できるが、典拠はプーシキン学者レルナーの引用する一節で、ズヴェーニヤ第 5 号（1935 年）の p. 70 を参照せよとナボコフは言う。ナボコフの博引傍証には恐れ入るが、レルナーは一体何から引用したのだろうか。ズヴェーニヤ第 5 号、p. 70 には、引用の典拠が示されているはずだが、ナボコフはそれをどうしてか示さない。また、会話中のカッコを使った書き加えは明らかにナボコフのものである。こういう書き方をするとナボコフの博引傍証が保障するはずの客觀性が勢い希薄になり、創作との區別が曖昧になる。また、ナボコフがプーシキンの意識下に想定するラーリンとヨリックを繋ぐ糸の実在を証明することは不可能であろう。これは如何にもナボコフらしい注釈である。

36 連 故郷に戻ったレンスキイは、ラーリンの墓の前を通り、昔を思い出して、感慨を催し、即興で詩を作る。

38 連 レンスキイは今は亡き自分の両親のことを思い出し、感慨に耽る。人生は苦しいことの連續で、収穫の時は束の間で、我々は順番に死んで行かねばならない。

* 5 行目の zhatvoy (収穫) に触れて、ナボコフはこれをフランス語の慣用表現で、Gallicism であるとする。フランス語では「収穫」は死、もしくは死によって終わる人生を表すという。しかし、この文脈では人生は畑を耕して畝を作るという苦労の連續で、収穫の時（幸せな時）は束の間であるという意味なのではなかろうか。Gallicism にこだわるあまり、ナボコフはプーシキンを歪めているように思われる。

39 連 自分の番が来る時までは楽しめばよい。私はこんな無意味な人生に未練はないが、これからも自分の詩を読んでくれるものはいてほしいと思う。

40 連 これからも私の詩に感動するものがいてくれて、私の詩がすっかり忘れ去られることはないかもしれない。そうであって欲しい。そうであれば私は未來の読者に感謝する。

41 連 詩人の作品は不滅であると言うよりは、ずたずたに引きちぎられて、ほこりを被る可能性がずっと高い。今も昔もこれから先も、読者は詩人の揚げ足を取り、厳しい注文をするくせに、鈍感である。

(芦本 滋)

言語変化とウィリアム・キャクストン

家入 葉子

「翻訳の諸相」との関連で、Caxton の英語を調べている。キャクストン工房の名前とともに知られる William Caxton は、1476 年に印刷技術を英国に導入した人物として有名であるが、同時に翻訳家でもあるからである。印刷技術の導入により、英國社会は写本の時代からインキュナビュラの時代へと移行する。同時進行で、英語の書き言葉の標準語が整備されつつあったことから、英語の通史を扱ったものの中には、標準語の成立と印刷技術の導入とが密接に関わっていたと説明するものも多い。しかし最近では、英語の標準化にはもっと複雑な要因が絡み合っていたとする研究が増えている。（近年は標準語の発達にかかわるどのような議論も「単純すぎる」という批判を受ける傾向があり、筆者自身、この問題には関与したくないと思うほどである。そもそも言語変化とは「原因」と「結果」の関係で単純に説明できるものではなく、現実に起こったこと、あるいは起こっていることを謙虚に記述することから始めるのが基本なのかもしれない。）

実際のところ、Caxton の時代の英語は相当に流動的であった。印刷が書き言葉を広めようにも、どの綴りを使えばよいのか、どの代名詞を使えばよいのか、複数形はどの形が適切なのかが問題になる。それほど、言語は揺れていた。*Eneydos* に付けられた序文は、「揺れている英語」に翻訳しなければならない立場の Caxton 自身がその苦労を語った箇所として有名である。しばしば引用される以下の部分では、egg の複数形についての悩みが述べられている（以下、引用中の斜字体は筆者）。（全文については<http://www.cie.uce.ac.uk/englishweb/Texts/Various/VariousHome.htm> を参照。）

And one of theym named Sheffelde, a mercer, cam in-to an hows and axed for mete; and specyally he axyd after eggys; And the goode wyf answerde, that she coude not speke no Frenshe. And the marchaunt was angry, for he also coude speke no Frenshe, but wolde haue hadde egges, and she vnderstode hym not. And thenne at laste a nother sayd that he wolde haue eyren; then the good wyf sayd that she vnderstod hym wel. Loo, what sholde a man in thyse dayes now wryte, egges or eyren. Certaynly it is harde to playse eueryman by cause of dyuersite and chaunge of langage.

現在調査中の *Reynard the Fox* を例にとっても、Caxton の英語が variants の宝庫であることがわかる。… wherfor I loue *them* wel dame rukenawe called *hem* forth and sayde welcome my dere chyldren...はその一例で、3 人称複数の代名詞（*them* も *hem* も ‘*them*’）がまだ安定していないことがわかる。法助動詞も確立途上にあるので、… er ye *shal* conne

excuse you of the deth のように shall と can の共存も可能であった。綴り字の多様性も顕著で、たとえば *Reynard the Fox* に 12 回現れる ‘friendship’ は、frendship という綴りが 10 回、frendshyp が 1 回、friendship が 1 回である。

そもそもと言語が大きく変化していたところに拍車をかけるのが翻訳の影響である。印刷技術が導入された 15 世紀は翻訳がたいへん盛んな時代で、*Reynard the Fox* の邦訳を出した木村建夫氏も、当時のイギリスで出版された本の「6 冊に 5 冊は翻訳本であった」と述べている (p. 178)。実際、Caxton が *Reynard the Fox* の中に使用した綴り字には、翻訳の原典として使用した Gouda 版の中古オランダ語の影響が見られる。

語彙面でも中古オランダ語の影響は著しく、Caxton 版の校訂を行なった Norman Blake は、中古オランダ語の影響と思われる 138 語をあげて解説している (pp. xxiv-xlvii)。なかには、ostrole のように英語としては意味不明の語も含まれている。Caxton の...the musehont the fycheus the martron the beuer wyth his wyf ordegale the genete the ostrole the bonssyng and the fyret ... に対応する中古オランダ語の箇所は、...die muushont dat fluwijn ende die marter die beuer mit sinen wiue ordegale die genette ende die ostrole die bonssinc ende dat foret ... である。イタチやテンなどの動物名が並んでいるところでもあり、中古オランダ語から英語にただ平行移動させたのかもしれない。また Blake のリストの中には、‘and’の意味の ende もある。これでは、中古オランダ語のままである！

Gouda 版が出版されたのが 1479 年で、Caxton 版の *Reynard the Fox* が出版されたのが 1481 年であるために、Caxton が翻訳を急ぎすぎたとか、Caxton の語学力が十分ではなかったというような指摘をする人もいる。たしかに翻訳にあてられた期間は短く、実際のところ、中古オランダ語と Caxton 版を丁寧に比較すると、誤訳も少なくない。一方で、原典中の地名を oxenford ('Oxford') のようなイギリスの地名に改めるなどの工夫をしている所もある。また Blake は、Caxton の英語が後半になるにしたがって原典の束縛の少ない読みやすい文体になることを指摘している。ただ早く仕事を終えたかったのだともいえない。

15 世紀にものを書く、翻訳をする、というときには、このような風土があったのであろう。その上での出版である。印刷技術の導入は、たしかに英語の歴史における一大イベントであった。しかし、印刷技術と英語の標準化を単純に関連づけようとすれば、批判を受けるのも無理はない。しかし、批判をする側にもこれといった妙案はないようである。

参考文献

- Blake, Norman F. (ed.) 1970. *The History of Reynard the Fox: Translated from the Dutch original by William Caxton*. EETS o.s. 263. London.
- Hellinga, W. Gs. (ed.) 1952. *Van den Fos Reynaerde: I Teksten, diplomatisch uitgegeven naar de bronnen vóór het jaar 1500*. Zwolle.
- 木村建夫 (訳) 2001. 『ウィリアム・キャクストン訳「きつね物語」——中世イングランド動物ばなし——』南雲堂。

活動状況

- ◆ 第二研究班が、「死と医学」をテーマに第4回研究会を開きました。
- 日 時： 2004年4月10日（土） 午前10時より12時半まで
- 場 所： フランス文学研究室（文学部新棟8階）
- 発 表： 1. 林田 愛（文学研究科博士後期課程）「エミール・ゾラと医学のポストモダン」
2. 吉田 城（文学研究科教授） 「ヴェネツィアと死の表象 シャトーブリアン、バレス、ブルースト」

お知らせ

- ◆ 前号でもお知らせしましたように、第一研究班が以下のように第9回研究会を開きます。
- 日 時： 2004年5月15日（土） 午後1時より
- 場 所： 京大会館 103号室
- 報 告： 小西昌隆（早稲田大学助手）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第3歌第1連から第15連まで」
- ◆ 4月から、英語学英米文学科博士課程後期1年目の奥村沙矢香さんが、新しく研究会のメンバーに加わりました。

後記：ニュースレターTRANSの8号をお届けいたします。今年度も、ふたつの研究班がほぼ隔月に開きます研究会を中心に、活動してまいります。秋には、第二研究班が海外からゲストを招いてシンポジウムを開く予定もございます。ホームページも随時更新し、活動状況をお伝えしてまいりますので、ニュースレターと合わせてご覧ください。（河井）

研究会事務局
〒606-8501
京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科
英米文学研究室（担当：河井）
tel./fax: 075-753-2828
e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp
web page: <http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/>